

「新たな都立中央図書館整備に係る有識者会議」（第2回）議事要旨

日 時：令和7年12月24日（水）17時00分～19時00分

場 所：都庁第二本庁舎16階教育委員会室（オンライン併用）

出席者：吉見委員（座長）、朝日委員、遠藤委員、木村委員、小林委員、田中元子委員、
田中里沙委員、中井委員、中島委員、中野委員、野末委員

議事概要

- 委員紹介
- 事務局から、資料に基づき以下について説明
 - （1）前回会議の主な御意見
 - （2）御意見を踏まえた検討内容

- 意見交換

【田中里沙委員】

- 時間のクリエイションについて、未来の時間軸も入った方がいい。
- 今ある施設を写真だけで見ると、イベント会場、ホールというところで、思考がストップしてしまう。ここから思考が何か動き出す仕掛けが必要。
- 例えば、泊まれる図書館、24時間稼働、ライブラリーバー等、図書館で本来はできないようなことができる面白い。この界限は面白い人が集まってクリエイションされることになるので、ヒューマンライブラリーのように、アーティストや多様なバックグラウンドを持つ人達がここでクリエイションしていくことを華やかに伝えられると良い。この空間の中で、縦と横、そして街にも出るという勢いも入れて、空間全体での交歓の様子などが実感できる作りにできると良い。静と動というのは図書館の中で必要だが、世界に誇る都市として、常に静かだけど物凄く活力があるといった空気感がどんどん出ると良い。
- 図書館はそもそも知の探求をする空間で、人に出会って議論するだけではない。ライブなラボ機能の裏付けとして、アカデミックな本があるという強みを出していける。こういう知に触れることで、全ての人が一生成長を楽しめると楽しいし、それが建築やソフトに現れると良い。

【中野泰志委員】

- ヒューマンライブラリーは非常に良い。障害領域では、障害のある人の語りを、本として聞いていくというような取組みが積極的に行われてきた。いろいろな方の語りをヒューマンライブラリーとして展開していく中に、障害のある人達や高齢者等、人々の多様性が展開される仕組みがあるのは良い。
- 物理的な空間は、最初からインクルーシブに、障害のある人たちも利用できるように設

計して欲しい。そうでなければ、インクルーシブな社会とは言えない。この空間に全く見えない人、雑音や音が気になる発達障害の人が来た時にどのように対応できるかということをも最初から考えて設計していくことはとても重要。

- イベントに関して、障害領域では、ピープルデザイン研究所の超福祉の学校が渋谷から全国に発信をしている。若者が集まる渋谷で、福祉というのは障害者のための特別なイベントではなく、全ての人のダイバーシティという意味での取組みという考えで、渋谷で展開するにあたり、ヒアリングをするのも良いのではないか。
- 日本科学未来館で活動するサイエンスコミュニケーターは様々な障害のある人達のことを考えてイベントを実施している。この養成、働き方等も参考にできると良い。

【野末俊比古委員】

- 図書館法や望ましい基準に基づき、現行の都立中央図書館が果たしている役割や、職員や空間、資料、設備施設等がまずあって、それがそもそも図書館の中核。それに加えて、この来館型のサービス、クリエーションの部分に広げて発展させていくということは、資料のどこかで常に確認した方が良い。
- 公立図書館かつ都道府県立図書館としての本来的なサービスは、島しょや奥多摩も含めた対全域サービスと、市区町村立図書館に対するサービス。そのために調査研究を中心とした資料を揃えることが本来的、根幹的な前提となる役割。
- 来館型サービスの充実のためにも、DX等により非来館型のサービスも更に充実させることが前提。おにクルは、すぐ近くの中央図書館に60~70万の蔵書があり、伝統的な図書館サービスを果たした上で、別の資料を揃えているので、創造交流が実現できている。近畿大学のアカデミックシアターも図書館が別にある。今回はそれを一つの建物で実現することになるので、空間イメージを考えるときには、木材の図書館の書架、事務スペース、リーディングフロア等をきちんと位置づけていくことが重要。
- 空間づくりについて、図書館の世界も今、来館型の創造型のものが求められている一方で、地域性もある。静かに本を読みたい、調査研究をしたい人も、都立中央図書館の場合には一定数いるので、静かな、集中する空間の必要性は高い。空間づくりにおいて、その柔軟性、可変性は大事にして欲しい。
- 予算の制限もあり、機能の優先順位を考える場合、図書館の利用者像を分類して、調査研究する人やクリエーションする人ももう少し細かく分けて、こんな利用者がこんな使い方をするという、ペルソナを作って、セグメント化すると考えやすい。
- 座長から「本を読むことの再定義」とあったとおり、ここは読書の概念を、最大限に広げた図書館になる。本だけではなく様々な情報を読む、使うことが求められる。
- 連携には、近隣、或いは都内に沢山ある大学も加えて欲しい。似た機能を持つ大学もた

くさんあり、社会貢献も役割になっている。そういうところと手を結ぶことでいろいろできることがある。既に都立多摩図書館では、大学のゼミと連動して活動し、様々なネットワークもできつつある。渋谷でもそういうことができると良い。

- 都立中央図書館は首都東京にあり、日本をリードする特別な図書館。東京ならではの、日本一の図書館だからこそできることを強調しても良い。
- 都立図書館協議会の今までの答申、提言等も踏まえて欲しい。国立国会図書館の科学技術情報整備審議会の提言も、生成 AI 等のテクノロジーが発達した時代に、図書館の役割がどういう方向に行くか議論をした成果が詰まっている。
- 市区町村の図書館との違いは議論に反映すべき。都道府県の図書館としてやる意味を議論の中に入れていくと、様々な機能の中で、優先順位や比重が決まっていく。

【木村朝子委員】

- ペルソナは大事。この辺りは、平日には研究者、学生、ビジネス層がいて、週末はファミリーマーケットがあり、マーケット訪問者、若者、外国人が来るという話があるが、ファミリー層がそんなに来るのか。ファミリー層や子供向けの話が書いてあったが、ファミリーを敢えて渋谷に連れてきたいのか気になった。
- いろんなターゲットに対して訴求する図書館を目指し過ぎると、何がなんだかかわらなくなる。わざわざこの地域に出かけることを考えると、ファミリー向けは地域の方がいい可能性もある。ふらっと立ち寄ると言うより、もう少し知的活動や、ここでしかできない変わった体験をしたいといった、敢えてここに来るファミリー層をターゲットにした方がいいのではないか。
- 研究者やビジネス層、若者が、外から見て入りにくいと感じる雰囲気は、利用者の減少につながるのではないか。例えば、出張先で少し仕事や勉強をしたい人、待ち時間に軽い作業をしたい人、移動に疲れた外国人旅行者などが、気軽に入って座れるようなスペースが見えると入りやすい。1階に、広々として落ち着いた雰囲気の中で、人々が勉強や仕事、本を読むなど思い思いに過ごしている様子が外から見える空間があると、「入ってみたい」と感じやすくなるのではないか。大規模なイベント空間が前面に出ている構成よりも、日常的な知的活動の様子が見える空間の方が、利用のきっかけになり、多くの人を訪れやすくなるのではないか。
- 逆にイベントとゆっくりするスペースは分けた方がいい。例えば、学会のちょっとした研究会、中規模のイベントやシンポジウム、演劇等ができる施設が周辺にそれ程ないのであれば、この地区にそういうものがあれば、敢えてそこに行くプロセスの中で、1階を通ってみて、「都立の図書館ってこんなに雰囲気いいのか、今度渋谷行ったら寄ろうかな」となるのではないか。ついでに寄って、図書館のいろいろな機能を少しずつ知って、滞在

時間が長くなればなるほど利用するインセンティブは上がるので、滞在することによって知っていったら、ちょっと調べるときにここの図書館で調べようか、となるのではないかな。

【朝日ちさと委員】

- ニーズに応える「サービス」という発想と、クリエイションや智の拠点というコンセプトは少し矛盾するイメージもある。ニーズに応じて満足するのではなく、消費者や利用者として、担い手、作り手との境がなくなっていくという考え方が必要。
- 社会的な課題である人口減少等もあり、サービスを提供してくれる人がいて、それを消費する人がいるという社会だけでは成り立たなくなる。消費サービスの受け手でもあり、作り手や担い手にも繋がるコンセプトがあると良い。
- 空間的なイメージとしては、共創施設として、どこかで誰かが何かをやっていることが感じられると、参加のハードルも下がる。一方、渋谷は高い建物が多く、オープンスペースが希少で価値がある。そのようなオープンスペース等もあり、情報がいろんな刺激を受ける場所にあるので、それを咀嚼するような静けさも貴重で、多様な受け皿、柔軟性があることは大事。
- プロセスや仕掛けに関して、官民連携の中で、委託・受託関係にならない工夫が必要。コンセプトを理解したプロデューサー等、智の創造拠点というコンセプトをきちんとマネジメントできる主体が必要。賑わいをもたらすだけではなく、学芸員や司書等の専門的な業務とのコラボレーションを仕掛けられる主体が求められる。
- AI の出現等もあり、情報との対峙の仕方がどう変わっていくか分からないが、土地の歴史や渋谷の機能、社会的課題等と、読書や情報をコラボさせていく多様な試みができるような、普通の図書館にはない、実験的な場所であっても良い。

【吉見俊哉座長】

- この土地には相当特徴的な高低差がある。崖の下に江戸時代から続く池があり、その周りは密林。渋谷のど真ん中にも関わらずジャングルのようになっている。
- 共創をいつから始めるのかがポイント。できてから共創しましょうということではなく、造られていくプロセスの中で人々がこの議論に加わっていくフェーズが必要。

【田中元子委員】

- 資料にある写真だけではインクルーシブを意識したデザインの建築かどうかを判断することは難しい。非常に意識して設計されている物件もある。
- ちえなみきやおにクル、仙台メディアテーク等、みんな目的やコンセプトが違う。資料の写真だけでは分からないことは多い。あくまで参考資料として、引っ張られない方がいい

い。ペルソナについても、子育てをしていたら学ぶ機会がないのか、子育てし始めたら1日中母親でいなければいけないのかと言ったらそうではないと思う。渋谷によく来る人にも、本当にいろいろな人がいる。

- 今回の図書館は、東京が「人間とは何か」と言うことに向き合って、再構築される図書館。人を属性等で見るのとは違う捉え方になるのではないか。何もしなくても素敵な場所で、目的がなくても足を運びたくなってしまふところなのか、それとも目的をしっかり決めて来る人に特化するのか、優先順位も意識しないといけない。
- メディアテークは、造られる前からの体制がとてもしっかりしていたので、時間が経った今も有意義に使われている。いろんなところから入ったり出たりできて、オープンで、尊敬すべき建築。そういう建物やアウトプットの裏側で何が起きたかと言うことは、研究する必要がある。崖を生かした設計も楽しみ。

【中島さち子委員】

- より深掘りした事例も見ていきたい。今の段階ではこの場が非公開なのは非常に良いが、どこかで公開して、みんなで議論する場が必要。
- 通常だと公募が出て委託という形である程度設計されると思われるが、おにクルでは1か月目で盆踊りをする等、市が主導して図書館のイメージを変える取組をしている。この会議のメンバーからも多角的に意見を出しながら進めているので、この会議自体をもっと公開しても面白い。委員とは違う形でも良いし、委員に問うだけではなくて、100人プロデューサー、1,000人プロデューサーという形もできないか。インクルーシブの話もあったが、造るプロセスにいかに関心のある人が入るかが本当に大事で、そうしないと見えないことが山ほどある。
- 完成したタイミングがいつかというのは曖昧になってくるので、オープンよりも前からその場を活用した、いろいろな人が参加できる形が大事。そのためには、それを仕掛ける、ある種プロデューサー的な人たちについて、ある程度限られた人達と、凄く沢山の人が一緒になって混乱しないような階層設計も必要。
- そこに見えない方、聞こえない方とか、いろんな人が入って意見が言えると、公開、セミ公開、非公開等分けながらテーマ毎に踏み込めると面白い。
- クラゲ館のプロデュースに際し、国からの予算は非常に限られていて、予算集めから自分たちでやる必要があった。協賛者が営業や広報のためではなく、対話を繰り返すことで、しっかりみんなで作るという、社会事象や社会貢献のようなより高い目的のもとで企業に関わってもらえることができた。例えば世界の科学館や図書館でも、理念に共感した企業からの協賛、寄付等で、部屋のネーミングライツだけで中身に口を出さないという形もある。都立図書館についても、公的な資金のみではなく、そういう複合型の、新たな官民

共創の形もあるのではないか。何らかのディレクションをうまく入れることで、宣伝ではなく、社会の実証や共創に繋がると良いのではないか。

- その上で、上まで吹き抜けがある、静かなエリアもあれば、カフェ的なところもあるといった図書館の設計はうまくする必要がある。広場や外の部分も上手にまとめたり、賑わいが見えるところと静かなところが共存できる場の作り方があると良い。
- 国連大学との共創も何かしら考えられないか。また、最近、ARでスキャンするという出てくる絵本に取り組んでいるが、そういうテクノロジーが入って、お互いに読み聞かせができるとか、テクノロジーラボ的なものも入ると良い。どんどん変わっていくものなので、みんなで遊びながら設計していくような形ができないか。

【吉見俊哉座長】

- 資料にある活動イメージの図もオープンにして、100人ぐらいのワークショップを開いて無数に意見を出してもらった方が良い。発注やデザインをコンペする段階になったらできなくなってしまう。比較的早い段階で参加してもらって、関心を持ってもらうことは、このプロジェクト自体のPRにもなる。

【中井孝幸委員】

- 今夏、北欧4カ国を回り、OodiやDokk1、ノルウェーで新しくできたDeichman Bjørvika等を見てきた。特にデンマークでは、小さい時から活字や本に親しんで欲しいという国の施策もあり、図書館に子供連れが多く来る。ベビーカー置き場が非常に沢山設置されている。
- 都立中央図書館の最大の特徴は、本を貸し出さないこと。コレクションが動かない、貸し出されていて、その本が手元になんかということがない、ずっとそこに置いてあることが、凄く大きな魅力。
- 図書館建築、建築計画学の観点から、図書館と他の公共施設の違いとして、開架になっていることが一番大きい。ワンフロア、部屋や壁で仕切られていないことが大きな特徴。また、200万冊超の蔵書、いわゆる知とかそういったものを見せることが、クリエイションに与える影響は大きい。
- そして、「出会う」、「見る・見られる」という点で、やっていることが見えるのが良い。浦安のメーカースペースは、司書が二名常駐している。人が必ずそこにいると、使われている。Oodiやデンマークの図書館もメーカースペースにちゃんと人がいて、作業しているので、その姿を見ながら、皆もやっている。人がいることは凄く大事。
- 現地は敷地にレベル差がついているので、それが一望できる雰囲気があると良い。建築家がこれから様々な提案を出してくる中、クリエイションの観点では、そういった見えた

り感じたり触れたりすることが凄く大事で、隣でやっている人達のことをちゃんと分かったほうが良い。図書館という空間の独自性を大切にしながら計画して欲しい。本はインテリアのように飾るのではなく、実際に使える資料として扱って欲しい。

- Dokk1 は吹き抜けが立体的に繋がっていて、多様な活動がこの図書館でできるようにいろんな施設が顔を出している感じがある。Deichman Bjørvika も同様の雰囲気がある。吹き抜けにいろんなものが顔を出していて、みんながやっていることが見えるというのが凄く良い。そういった空間の作り方も必要。

【吉見俊哉座長】

- ここは高低差がある崖のような空間。200万冊の本が渋谷の崖にバーっと連なって、崖の小道を讀書しながら歩くななんて素晴らしいと思う。

【遠藤新委員】

- Deichman Bjørvika は、中が少しだけざわついていて、そのちょっとしたざわつき感がとても心地いいと感じた。
- オスロは人口71万で観光客が60万。合わせて約130万人で、人口密度が低い。人口密度が低く人が少ないからこそ、人が集まる場所は価値がある感じがする。
- 都市の広場には、人がいて、何となくちょっとしたざわつき感がある。そこに自分が、どういう場所でも、ちょっと腰を下ろしたり、座って居場所を見つけることができる、そういう心地よさが、特に北欧の都市空間広場にはある。Deichman Bjørvika は、そういうものが立体的に作られている印象。象徴的な、縦の突き抜けになっているところから、広場的に、各層に、人がちょっとざわつきながら、それぞれの場所で本を読める場所や勉強できる場所が繋がっていて、それがその図書館の魅力だなと感じた。奥に行けば行くほどテーブルがあり、自然と静かに使われていて、うまいこと使い分けができています。どこでも座って本に向かえる場所がある、立体的な広場だと感じた。そういう居心地の良さを図書館ならではの建築として作る、図書館ならではの広場的な心地良さという新しいチャレンジがあってもいいのではないかと。
- 表の通りから一番奥までを切るC-C'断面は270mとある。270mの奥行き、広さ、長さがある建築は、非常に大きなスケール感で、先程のOodiが200m弱、戦艦大和が264m。街で言うと、ニューヨークのマンハッタンのグリッド街区の長い方が平均で260、270mぐらいあり、ここに何かを作るときに、マンハッタンの街区一個分を作るぐらいの考え方、見方をすることが大事。このスケール感を生かして、一個のぼてっとした建築ではなく、西側の通りにいろんなものが並んでいる、街のような建築を作るという考え方を最初の段階で持っておくことが必要。いろんな使い方や交流、クリエーションの場

を作っていくというのは、建物を縦に伸ばしていく中で考えることだけではなく、横に広げていく、まさに町のストリートを作るという考え方にマッチする。インクルーシブについても、縦より横に展開する方が当然相性が良い作り方ができる。断面を生かしていくことも含め、この270mというものをうまく生かす空間の作り方ができれば、他にない場所になるのではないかな。

- 渋谷の真ん中近くで大きな容積を使わなければいけない場所なので、縦に長い建築と横に長い建築をしっかりと作り分けていくという考え方が大事。

【吉見俊哉座長】

- 敷地条件も踏まえ、「まちとしての図書館」として、どういうまちを作るかを考えていくと、発想のパラダイムが少し転換して、面白いことになってくるのではないかな。

【田中元子委員】

- 台湾の高雄図書館では、その展示や本の中に、街の書店を紹介するコーナーがあり、高雄という街で、本に触れる生活を多くの人に体験して欲しいという高雄市の目的意識を感じた。新たな都立中央図書館も、東京で、渋谷で生きるということがどのようなことが、形になっていて欲しい。
- 図書館があり、その向こうにストリートダンスの人が見える等、他ではないことが沢山起きそうな気がしている。様々な生き方があり、こういう人もいるんだなということを、偶発的に目にするのは、クリエイティビティに対する影響も高い。その要素が、お互い閉じて見えない、完全な壁で仕切られたものが集まっているというより、関連しながらできていくことが理想的ではないかな。

【吉見俊哉座長】

- 高雄は、都市デザインが凄く面白い。田中元子委員や私がもう十年來実現しようとしているトラムも見事に高雄は実現してしまって、東京よりもだいぶ先を行っている。

【野末俊比古委員】

- スペースも人も限られる中、図書館ならではの膨大な資料、電子的なものも含めたコレクションや情報源があるからこそできるクリエイションというところに、優先順位がある。資料と離れ、イベントをやるだけなら図書館でなくても良い。図書館だからできることを優先していくのが良い。
- その点、既存の図書館、特に複合的な施設、機能を持った図書館を掘り下げていくことは重要。石川県立図書館が7万冊のテーマ配架は、既存のコレクションがあった上ででき

ている。メインは書庫。調査研究支援、全域サービスをしなければならないので、書庫で扱うのはやはり効果があり、効率も良い。建築を考えていくにあたり、図書館として、基本的に持っていくところをベースに、資料があるからこそできるクリエイションを考えていくことが、方向性としては一つある。

- 北欧では児童館と博物館、公民館と一緒に図書館に含まれているが、日本は細分化されている。ここに置くのが児童館なのか、子育て施設や博物館、公民館、図書館なのか、それらの文脈で、目指されていることを議論するのも、方向性の一つ。
- 「本当は図書館に来て欲しいけど、まだ来ていない人」へのアプローチも重要。コレクションを使っているからこそそのクリエイションという点で、図書館を使ったらいいことがあるのに、来たことがないという人達に、アプローチするのも良い。
- 那須塩原市の図書館はまさに「まちとしての図書館」を目指していて、特徴的。

【吉見俊哉座長】

- 200万冊の蔵書は物凄い強み。それを生かしながら、縦割りを打破する空間的なデザインをどうするかは根幹的に重要。

【中野泰志委員】

- 新たな中央図書館で実現するサービスや空間のイメージについて、最初から、バリアフリーやユニバーサルデザインを考えて欲しい。計画段階からの当事者参加は非常に重要で、国連の定める障害者権利条約の中でも重視されている。何らかの形で当事者参加ができ、意見を聞きながら実装できると良い。読書バリアフリーを強く主張されている、芥川賞受賞者の市川沙央さんにも、御意見を伺えると良い。
- 新たな図書館サービスの中では、DXは非常に重要。今、出版社も含めて、国際的な規格であるWCAG2.2やEPUBアクセシビリティ1.1への対応に、日本全体で取り組んでいくことが議論されている。
- クリエーションを生み出すプロセスや仕掛けについて、アクセシブルな図書の作成に際し、ボランティアの数が非常に少なくなっており、これをどう支えるかが難しい問題。新たなボランティア活動が、この中央図書館から生まれてきてもいいのではないかと。
- 創造交流図書館は、アクセシブルであって欲しい。教育課程や学習指導要領の改正の柱の一つであるインクルーシブ教育の実現において、図書館は重要な位置付けとなっており、社会に出ていく子供達に対し、学校だけではなく、社会における交流及び共同の学習の場として、この都立中央図書館が位置付けられると良い。
- 渋谷は、クレヨンハウスや子どもの城、青山劇場があったところで、子育て世代には非常に魅力的な場所であった。プレイパークという、渋谷区全体で取り組んでいる冒険遊び

場もあり、渋谷の中心的な場所の一つである神宮前五丁目では、子育ての拠点としての機能が中央図書館で更に発展できるような形になると嬉しい。

【小林真理委員】

- これをどのように造っていくかが重要。これだけ大きな規模の区画を、図書館以外のものも含めて提案してもらおうということになる。デベロッパーと一緒に組むところが何件か出てくることが望ましい。その時に、例えば建築家等に、こちらの示す様々なコンセプトをデザイン化して、図書館を含めた様々な施設の一体的なまちづくりの提案を、いくつか出してもらえるのが心配。大手のデベロッパーが、こちらの意を汲んでくれる設計を提案してくれるか、こんな図書館にして欲しい、いろんな機能があって欲しいという話が出ているが、それを実現してくれる人をどうやって選べるかが重要。
- 100人くらいの方に参加してもらって作ることも良いが、それをどの時点でやるのか。いろんなコンセプトを出しているところに加わってもらえるのか、こちらの出したコンセプトに対し、いくつかの案が出てくるような形になって、そこでみんなが関わるのか等、いろいろな段階がある。様々な意見が出てくる中で、これを一つの具体的な建造物やまちにすることは、私達にはできず、専門家が関わってもらってこそ形が見えてくる。具体的な案が見えてくる中で色々ディスカッションできると良いが、そういう仕組みを、例えば民間事業者に関わってもらいながら作ることができるのか。
- インクルーシブで、バリアフリーで、ユニバーサルなデザインを最初からコンセプトとして入れることは大事。また、そもそも図書館が堅持しなければならない機能として、絶対に外せないもの、今後もし入れなければならないものもある。例えば200万冊の蔵書そのまま移転するのかどうかということもある。移転することにより機能を維持するのは当然として、その当然のあり方もただ水平移行ではなく、機能強化をしていく必要があると思う。その中で外せない重要な部分は何なのかという確認も必要。それを明確にした上で、こちらが最低限絶対に外せないコンセプト、私は、それはインクルーシブだと思うが、それを求めて、空間設計の専門家に管理運営のことも考えながら出してもらいたいのではないかと。図書館は、普通に考えると全然バリアフリーでもインクルーシブでもなくなってしまう危険性があるので、これを全面に出しながら図書館のあり方を考えてもらうことは、まち全体も含めて重要。

【朝日ちさと委員】

- 創発を生み出す都市の集積の要件は、ラーニング、学びと、シェアリング、マッチングと言われている。それがあとうまく創発して集積すると言われているが、それを揃えたらどこでも集積が起こるかと言ったらそうではない。やはりそこにもともと集積、何らか

の蓄積があるところが、より有利に集積する。

- まちとして考えたときに、200万冊の資料があった上で、大名屋敷や子どもの城があった、池がある等、この場所が蓄積してきたものが、ラーニングとかマッチングを生み出していく。子供や女性の機能、この土地が蓄積してきたことを深めてから、設計者や民間事業者、共創の皆さん等に提示できると良い。

【中島さち子委員】

- 中核となる民間事業者の影響が大きい。建築家も最近は共創の形でやる人も増えてきて、場の作り方への影響も大きいので、その選び方が重要。決まってからも対話を繰り返すことを保証してくれるような建築家や民間事業者が手を挙げるのだろう。
- 南砺市で、事前にいろいろ実証させてみて、その中で面白かったところが選ばれたといった新しい形の随意契約ができている。難しい部分もあるが、いろんな民間事業者に公募の前に公開し、いろんなワークショップをやってもらう等、巻き込み方も見ながら、その後には公募して提案を求めるといったやり方もあるのではないかと。創発をどこまで生み出せるかが、かなりそのディベロッパーに拠ってしまうところがリスクでもある。逆に、ディベロッパーに頼りすぎない軸をあらかじめ、共創の形で都が主導でもつなど、違うやり方も模索できないか。

【田中元子委員】

- 闇雲にこういう建物を造りたいと公募する、実績があるからできるだろうということよりも、いろんな事例を深掘りして、建築家が何をやるのか、どういう思想を持って、何を形にしてきたのかということも見て欲しい。建物は、色んな人が目に見えない形を整えていて、様々な協力があって、やっとできているものだと思う。建築家は建物を作るだけではなく、そういう人的、条件的なものを構築、整備していく仕事なので、そういう能力が最大限使える場になると良い。

【吉見俊哉座長】

- デベロッパー、建築家に示すコンセプトの明瞭さが求められる。コンセプトが明快でしっかりしていれば、市民が100人、200人参加しても揺らがない。参加してもらって議論をし、話題になることが、建築家やデベロッパーに対し、ある方向の中でやってもらうということのプレッシャーにもなる。市民の参加についても、デベロッパーや建築家の参加についても、最初のイニシアチブをこの委員会が持つことが大切。
- 代表的ないくつかのライブラリーに関しては深掘りが必要。キーパーソンに話してもらう場を持った方が良い。

- バリアフリーやインクルーシブ、200万冊の資料を創発・クリエーションに繋げる最適の道等について、重要なポイントを際立たせ、構造化する作業が必要。